

特色ある私学をめざして 142



最新の工学院が 最高の工学院

～みんながワクワクして
みんなが輝く学校へ～

工学院大学附属中学校・高等学校 校長 中野由章

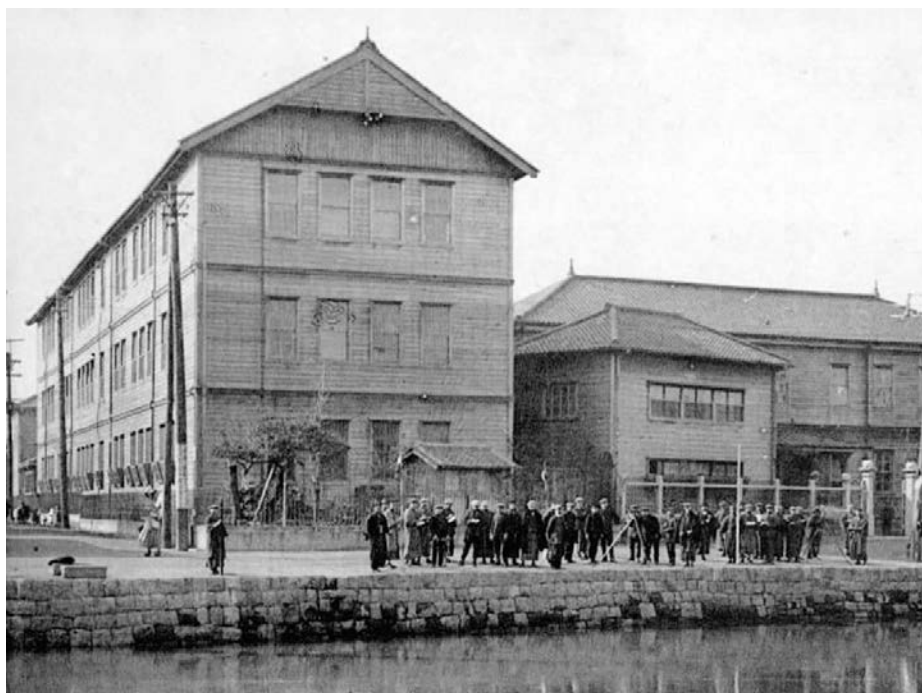


1. 本校の沿革

工学院大学附属中学校・高等学校の沿革を簡単にご紹介します。

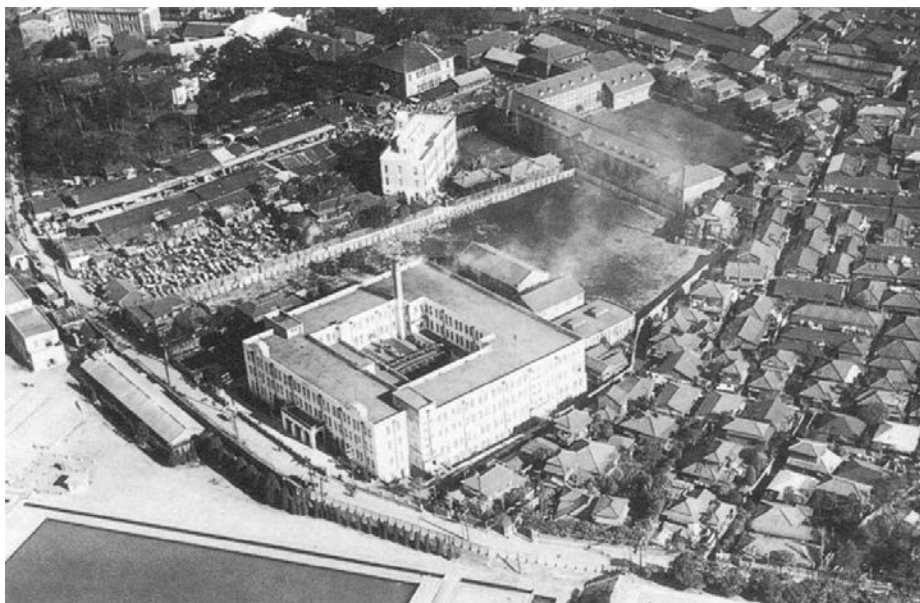
1887（明治20）年10月31日、帝国大学総長渡辺洪基を中心として工手学校設立協議会を開催しました。工学院はこの日を創立記念日としています。

1888（明治21）年、築地に工手学校として開校しました。これが工学院大学の原点です。



▲ 築地にあった頃の工手学校

1928（昭和3）年、東京市淀橋町に新校舎が落成します。この場所が、今の新宿区西新宿にある新宿キャンパスです。



▲ 淀橋（現・西新宿）に落成した校舎

1928（昭和3）年、校名を工学院と改称しました。

1944（昭和19）年、工学院工業学校を開校します。これが、工学院大学附属高等学校の前身校です。

1948（昭和23）年、学制改革により、工学院工業学校を工学院高等学校としました。

1949（昭和24）年、工学院高等学校を工学院大学高等学校と改称しました。

1963（昭和38）年、大学が八王子市中野町に八王子校舎を開設しました。これが現在の八王子キャンパスです。八王子は学園都市となっていますが、八王子へ最初に移転した大学は、工学院大学です。

1967（昭和42）年、八王子市中野町に高等学校が移転しました。

1989（平成元）年、新宿キャンパスに高層棟が落成しました。これが、日本で初めての都市型高層キャンパスです。

1992（平成4）年、工学院大学高等学校を工学院大学附属高等学校と改称し、工業に関する学科を廃止し、普通科のみの高校となりました。

1996（平成8）年、工学院大学附属中学校を開設しました。

2001（平成13）年、現在の中学校校舎が完成しました。

2002（平成14）年、男子校から共学校となりました。

2006（平成18）年、現在の高校校舎が落成しました。

2022（令和4）年、工学院大学創立135周年を迎えました。



▲ 工学院大学八王子キャンパス全景（右下が中高）

2. 本校のクラス編成

2022年度入学生から、中学校は先進（旧特進理数・特進）3クラスとインターナショナル1クラスの4クラスで定員105名、高等学校は先進文理（旧サイエンス・文理先進）4クラスと文理3クラスとインターナショナル1クラスの8クラスで定員290名となっています。

中学校の先進クラスは、3年次に高校の数学Iと数学Aを先取り学習します。また、インターナショナルクラスは、数学と理科を英語イマージョン教育とし、総教科時数の半分以上で英語による授業を展開しています。

高等学校の先進文理クラスは、2年次からスーパーサイエンスクラスを設定し、理系で突出した力を持つ生徒をサポートする体制となっています。インターナショナルクラスは、数学、理科、公民などで英語イマージョン教育を行い、総教科時数の半分以上を英語による授業として展開しています。

中学校		高等学校	
先進	先進文理	スーパーサイエンス	
		理系	
		文系	
インターナショナル	インターナショナル	理系	
		文系	
		文系	

3. 本校の教育の特色

本校は、グローバル教育と ICT 教育を 2 本柱として力を入れています。そのことを K-STEAM と表現し、「グローバル・リベラルアーツと数理情報工学を融合した、工学院らしい先進的教育」と定義しています。失敗を恐れず積極的に挑戦し、新しい価値を創造し、人間性豊かな社会の構築へ主体的に貢献することを目指しています。

グローバル・リベラルアーツについて、インターナショナルクラスを中心として、先進的なグローバル教育を展開してきた本校は、2017 年に Cambridge English School、2021 年に Cambridge International School として、何れも日本で初めての認定校となりました。仲間と協働しながら豊かに発想してアイデアを形にする過程を学ぶことで社会に貢献できる創造力を身につける「デザイン思考」や、英語イマージョンで行われる「哲学」など、グローバルに活躍できる有為な人材の基盤となる教養をしっかりと育てています。

ICT 教育については、8 年前から 1 人 1 台のタブレット PC 端末を使って教育活動を展開しています。全生徒・全教職員が、ICT 利活用に長けていて、すべての教育活動が Surface などの ICT 端末なしでは成立しないような PBL (Project Based Learning) を基本として展開しています。2020 年も 2021 年も、COVID-19 によりたびたびオンライン授業を展開することになりましたが、本校では通常の時間割どおりの授業を実施できています。しかも、配信される動画を視聴するという受け身のものではなく、ディスカッションやグループワークによる PBL など、登校時と変わらない内容になっています。理科実験や体育実技なども、予め準備内容を伝えておき、リアルタイムに遠隔で各自実習を行うなど、授業の質を落とすことなく実施しています。

さらに、2022 年度から、教育系 YouTuber としても著名な安藤昇氏に ICT 教育アドバイザーとして着任していただき、本校の ICT 教育をより高度なものに進化させています。

4. 本校の強み

本校は、緑が豊かで広大な工学院大学八王子キャンパスの中にあります。通学には、JR八王子駅、京王八王子駅、拝島駅、南大沢駅、新宿駅西口から、スクールバスを運行しています。

本校の強みは何といっても、工学院大学の附属学校であるということです。世の中に、大学の附属学校は数多ありますが、大学のキャンパス内にある附属学校はそれほど多くありません。さらに、工学院は、中高と大学が緊密に連携しています。タモリ倶楽部の準レギュラーメンバーと言っても過言ではない伊藤慎一郎学長をはじめ、野澤康副学長や蒲池みゆき副学長と私との間はホットラインで繋がっていて、常に情報を共有しながら学校運営を行っています。工学院大学の先進的な教育・研究を中高生も享受できるようさまざまな連携をしています。大学のサッカー場・野球場・体育館・ラーニングコモンズ・図書館などの施設利用は当然として、高校1年の3学期から高校2年いっぱいかけて全員が取り組む「探究論文」を大学の先生から直接指導していただいたり、世界的に有名な大学のソーラーチームと中高の自動車部と一緒に活動したり、学習活動や課外活動のサポートを大学生に行ってもらったりと、大学キャンパスの中であって、かつ、中高大院連携（中学校から大学院まで一貫した連携を本校ではこう表現しています）を緊密に行っているからこそ実現できています。

工学院大学は、先進工学部（生命化学科・応用化学科・環境化学科・応用物理学科・機械理工学科）、工学部（機械工学科・機械システム工学科・電気電子工学科）、建築学部（まちづくり学科・建築学科・建築デザイン学科）、情報学部（情報通信工学科・コンピュータ科学科・情報デザイン学科・情報科学科）を擁する理工系大学です。工学院大学にはない学問領域については、幅広く他大学とも連携しています。特に、東京薬科大学、麻布大学、東京経済大学などとは連携協定を締結し、各大学での実験授業や、本校での出前授業などを行っていただいています。これは、イベントとして単発的に行うのではなく、その学問領域への興味・関心・理解を深めるために継続的に展開しています。

さらに、電気通信大学とも連携協定を結んでいます。本校の進路指導主任教諭が、電気通信大学のアドミッションセンター特任准教授を兼務しています。これは、学校法人工学院大学と国立大学法人電気通信大学の、それぞれと雇用契約を結び、各機関の責任の下で業務を行うことが可能となるクロスアポイントメント契約で実現しています。国内にこのような事例は他に見当たらず、本校と電気通信大学の関係が非常に強固なものだという証拠でもあると思っています。

5. 私の履歴書

私は、三重県伊勢市で生まれ育ちました。伊勢と言えば神宮で有名ですが、20年毎に行われる式年遷宮では、お木曳やお白石持などに神領民としてずっと参加しています。

物心ついた頃から鉄道が好きで、将来は国鉄（現・JR）で長距離列車に乗務したいと思っていました。中学校を卒業したら、高校へは進学せずに、国鉄へ就職しようと考えていたのですが、列車乗務をしたいなら高校を出てから入職試験を受けるように言われ、地元の三重県立伊勢高等学校へ進学しました。

しかし、忘れもしない、私が高校在学中に、国鉄が大赤字のため職員の新規採用を停止することになってしまいました。国鉄以外に就職希望のなかった私は、興味のあった情報工学を学ぼうと考え、芝浦工業大学へ進学します。私の実家は裕福とは程遠い家庭環境でしたが、日本育英会（現・日本学生支援機構）、伊勢市、長澤科学育英財団の3か所から奨学金を貸与・給付していただき、さらに、アルバイトをしながら学費や生活費を工面して大学へ通いました。学部の4年生と大学院修士課程では、KDD研究所（現・KDDI研究所）にお世話になり、通信ネットワークの研究をさせていただきました。この時にお世話になった方とのご縁で、先程述べた電気通信大学との連携協定の話が進みました。四半世紀以上経ってから、まさかここでこんな形で繋がるとは夢にも思いませんでした。このご縁には本当に感謝するとともに、感激しました。

大学院を終了後は、日本IBM大和研究所へ就職し、ソフトウェア開発プロセスの研究・開発に従事しました。流石、世界のIBMの研究所だけあって、社員のみなさんは超一流の優秀な方ばかりで、非常に刺激的で理想的な環境でした。日本語の読み書きはできなくても特に不自由しませんが、英語の4技能は必須です。ドキュメントはすべて英語ですし、ミーティングのメンバーに外国人がいれば英語でのディスカッションになります。さまざまな国のメンバーが参加して、母語が英語という人が一人いなくても、英語という共通言語でコミュニケーションすることで全員が意思疎通できるというのは、当たり前のことですが、凄いことだなと実感しました。また、合理的な人事制度や私の価値基準はここで醸成されたように思います。

高校時代の親友が三重県で公立高校の教員をしていました。そんな彼の誘いに乗って、私の郷里である三重県の高校教員になりました。IBMは今考えてもこの上ない素晴らしい環境だったと思いますが、自分の専門である情報工学の魅力を伝えつつ高校生と一緒に成長したいという思いがあったのでの転身でした。ただ、年収は暴落したので、前年の収入で額の決まる住民税には苦しみました。この初任校で知り合った英語科教員が生涯の伴侶となっています。三重県では、県立名張西高等学校と県立尾鷲工業高等学校に勤務しました。11年間勤務しましたが、ここで教員のいろはを教えてくださいました。生徒と深く関わり、教育とは如何にあるべきか、特に県立尾鷲工業高等学校は単身赴任だったため、夜を徹し

て先生方と議論し、いろいろ教えていただきました。私の教員としての原点は、この三重県です。

私は高校教員として充実した時間を過ごしていましたが、自分の授業を科学的に分析し、もっとよいものにしたいという思いがありました。また、世界中の一流の研究者と連携したいという願いもありました。さらに、当時は奈良県桜井市に住んでいたのですが、義父と実母を同じ年に亡くし、大阪で義母が、伊勢で実父が一人暮らしとなり、このままにすることはできないという思いもありました。それらを叶えるためには、大阪にある大学の教員になるべきだと考え、千里金蘭大学へ移り、情報教育と教員養成を担当しました。高校教員時代から行っていた情報処理学会での活動を本格化させ、コンピュータと教育研究会を軸に研究を推進しました。その後、大阪電気通信大学へ移り、情報教育に専念しました。大学入試センターで情報関係基礎の作問を2年間担当し、高大接続としての大学入試のあり方や作問の tips などをご時に獲得できました。大学教員として9年間奉職しましたが、ここで研究とは如何にあるべきか、そして、教育と研究をどう繋げていくべきかということをご学ぶことができました。

私は高校教員が性に合っていると思っていたし、そもそも、自分の授業をもっとよいものにしたいというのが大学教員になった動機の一つでした。そろそろ高校現場に戻らないと、せつかくの経験を高校現場に還元できないと思い、再び教員採用試験を受けることにしました。その際、高大接続だけでなく中高接続、特に、中学校の技術科と高校の情報科・工業科との連携をやってみたかったので、小学校・中学校と高校を同じ教育委員会が管轄している政令指定都市を考えました。神戸市を希望したのは、全日市の市立科学技術高等学校も定時制の市立神戸工科高等学校も非常に魅力的な学校で、そこで働いてみたいという強い思いがあったからです。配属された市立科学技術高等学校は、外から眺めている以上に、生徒のみなさんも教職員も明るく前向き・意欲的で、活力あふれる素晴らしい学校でした。この学校で8年間お世話になったのですが、最後の2年間は教頭という立場で職務にあたらせていただきました。お世話になった教職員は枚挙に暇がありませんが、私如き者でも教頭を務めることができたのは、このときの校長先生と相方の教頭先生と事務長先生のおかげです。特に、校長先生はその当時も今も私にとって理想の校長先生であり、校長として何を根拠にどう判断して行動すべきか、また、どのように心構えるべきかをしっかりと教えていただきました。

神戸市に骨を埋めるつもりでいたのですが、ご縁があって、2021年4月に工学院大学附属中学校・高等学校へ校長として着任しました。工学院大学は芝浦工業大学とライバル関係にあるため、着任当初は至るところで「芝浦工大の出身らしいな！」と言われました。

6. 私が心がけていること

私は、英語が得意ではありませんが、大好きです。私は、プログラミングが得意ではありませんが、大好きです。私は、学習が得意ではありませんが、大好きです。出来が悪いことを棚に上げるための言い訳のようにも見えますが、大好きだというのはとても幸せなことだと思えます。

学校は、たくさんの未知の扉を開くことができるとてもワクワクする場所だと思っています。しかし、かくあるべきという虚像に支配されて、学校が辛く苦しい場所になってしまっている生徒や教職員がいるとしたら、これほど悲しいことはありません。生徒や教職員の思いをしっかりと受け止めて、私の意見も参考にしてもらいたいという思いから、校長室は Open Door Policy としていて、取り込み中か不在の時を除き、ドアを常に開放しています。ドアが開いている時は、用がなくても誰でも自由に入ってきてほしいと生徒や教職員に伝えています。生徒は素直ですね。学校をもっとよくするための提案をしに来たり、悩みごとの相談に来たり、時間つぶしの雑談をしに来たり、お弁当を食べに来たり、毎日千客万来という状態です。いろんな生徒がいろんな話をしに来てくれるので、生徒目線で見えた学校の様子がよくわかり、また、生徒との会話が楽しくて仕方ないので、私にとって宝のような大切な時間となっています。コミュニケーションを密にして、風通しのよい学校であってほしいと思っているので、教職員との個別面談も年に複数回お願いしています。

授業参観も大好きで、生徒と一緒に授業を受けたりしています。因みに、朝は玄関で生徒の登校を出迎えるのですが、単なる出迎えだけではもったいないと思い、「ゼッコーチョー・ジョニーの靴磨き」と称して、生徒の靴磨きもしています。革靴は古くなってもきちんと手入れしていれば、きれいに快適に使うことができます。毎日履いている靴にもしっかりと気を配り、きちんと手入れをするような生徒になってほしいという思いから始めました。

本校の校訓は、「挑戦・創造・貢献」です。生徒にも教職員にも、挑戦することを求めています。挑戦したからといって必ずうまくいくとは限りません。むしろ失敗することの方が多いいと思います。だからといって、挑戦することを躊躇しないでほしいのです。私は、挑戦することこそがかっこいいと思っています。校長は、第一線で授業をしたり担任をしたり生活指導をしたり部活動で関わったりすることはできません。すべての結果責任は校長が負うので、教職員一人ひとりが具体的に何をどうすればよいか考えて、失敗を恐れず遂行するようお願いしています。

「最新の工学院が 最高の工学院」だと思っています。今の本校は自慢の生徒とその生徒をしっかりサポートする素晴らしい教職員で構成された最高の学校だと自信を持って言えます。しかし、まだまだ改善の余地はあるはずです。些細なことであっても改善を試みてより良くしようと生徒も教職員も取り組んで、今日は昨日より、明日は今日より、もっと素敵な学校になることを目指していきたいと思っています。